

## 看護系大学生の看護に関する認識の変化

### — 第一報 入学初期における学生の看護に関する考え方 —

相原 ひろみ\*, 酒井 淳子\*, 徳永 なみじ\*, 関谷 由香里\*  
岡田 ルリ子\*, 青木 光子\*, 岡部 喜代子\*

## Aspects of the Recognition of Nursing by First-Year Nursing Students

Hiromi AIBARA, Junko SAKAI, Namiji TOKUNAGA, Yukari SEKIYA  
Ruriko OKADA, Mitsuko AOKI, Kiyoko OKABE

### 序 文

現在、看護系大学が119校と急増し、全看護学生のうち15%を占めるに至っている。しかも大学教育における看護の実践能力の育成<sup>1)</sup>の充実が求められ、各大学において、様々な試みが行われている。本学では平成16年度に短期大学から大学へと移行したが、ほとんどの教員は、大学教育がはじめての経験であり、現在、大学生に対する看護の基礎教育をどのように展開することが効果的であるかと期待と不安を持って日々模索しつつ取り組んでいる。そこで、看護基礎教育の中で、大学生が、看護に関する考え方がどのように変化し発展していくのかということを中心にすることを明らかにすることができれば、我々の教育評価の材料になるとともに、大学全体のカリキュラムの検討にも役立つと考えた。また、学ぶ側の学生の看護に関する考え方は、大学における教育刺激のみならず、社会の価値観や職業意識などの影響を受けて多様化し、年とともに変化する側面があるので、学生の看護に対する感じ方や考え方を把握することは、教育方法の開発のためにも重要であると考えた。

まず、看護に関する認識について、すでに明らかになっている研究を、医中誌Webで検索したところ、看護概念あるいは看護師の職業に対する認識・看護観、看護のイメージなどについての研究が複数行われていた。学生の「病院」「患者」「看護婦」「看護」のイメージの変化を1年次と卒業時点で比較した研究<sup>2)</sup>、学生の看護認知の変化を入学から卒業までを比較した研究<sup>3)</sup>では、学生の傾向は明らかになっていたが、その認識の内容は十分明らかにされていなかった。短期大学生の卒業期における看護概

念の認識構造に対する研究<sup>4)</sup>では「3年間のカリキュラムで学んだことは何か」をテーマに行っており、学生の幅広い学びが報告されていたが、経時的な認識の変化は明らかにされていなかった。大学の1年次生を対象にした研究<sup>5)</sup>からは、看護観の形成過程に関して、看護の4つの主要概念として環境、健康、人間、看護をどうとらえているかを調査していた。その結果、漠然ととらえていたイメージが履修科目の影響を受けて具体的な内容を持つに至ったことが明らかにされていた。また、看護学生の3年間の看護概念の変化をとらえた研究<sup>6)</sup>では、看護の主要概念として環境、健康、人間、看護のうちの「人間」に焦点をあてて、1年間の間に縦断的に3回の調査を行った結果をまとめて「共存・人間関係」「個別性と共通性」「複雑さ」など、14のカテゴリーを抽出していた。しかし、それぞれの調査時期による認識の変化は、記述件数の数のみの記載であった。

以上のことから、大学生が、4年間にわたり看護に関してどのような認識の変化をきたすのかを質的に把握することは、今後の教育方法の発展に意味があると考えた。変化の過程を縦断的に明らかにすることによって、教育効果を検討し、教育方法の開発とともに大学全体のカリキュラムの検討材料を得ることができると考え、入学初期における学生の看護に関する考え方を明らかにすることを目的に、この研究に取り組んだ。

### 研究対象および研究方法

#### 1. 研究対象

4年制大学の看護学科1年生 60名

\*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

## 2. 研究方法

### 1) 質問紙の作成

学生が、現段階における看護全般に関する自己のとりえ方をありのままに表現するように、先行研究<sup>7)8)9)</sup>を参考に自由記述形式の質問紙を、研究者が作成した。

その設問の詳細は、看護の目的を問う設問として〔①看護は何をめざして行うと思いますか。〕とした。以下、看護の対象を〔②看護の対象となる人はどのような人だと思いますか。〕、看護の役割/機能を〔③看護職の仕事はどのような内容だと思いますか。④看護に必要な技術には、どのようなものがあると思いますか。習ったものにかかわらず、思いつくものを具体的にお書きください。〕、対人関係を〔⑤看護の対象とより良い人間関係をつくるためにはどのようなことが重要だと思いますか。〕、看護職者になるための要素を〔⑥自分の、看護職としての能力を高めるためにはどのような取り組みが必要だと思いますか。〕、看護が行われる場を〔⑦看護は、社会のどのような場所で行われると思いますか。具体的にお書きください。〕、以上の7つの設問とした。

### 2) データ収集方法

研究対象者である看護学科1年生60名全員に対し、研究目的と内容、および無記名の調査で授業評価にはいっさい影響しないこと、研究への参加は自由であることを説明後、質問紙を配布し依頼した。回収方法は、留め置き式とし、平成16年5月13日～5月28日の約2週間とした。なお、学生は、専門基礎科目で「医療概論」「人体の機能・構造」、専門科目で「看護学概論」「基礎看護技術Ⅰ」について学習している途上であった。

### 3) データ分析方法

質問紙の記述内容から、学生の記述の文脈を2人の研究者が熟読し、独立した意味のある文節および単語を研究者2人が意味の一致をみたものやすく上げて、学生の看護に関するとりえ方を明らかにするためのデータとして整理した。そのデータのひとつひとつの意味をとらえて、その意味が共通していると判断できるデータをグルーピングし、意味に基づいて命名し、それをサブカテゴリーとした。さらにサブカテゴリーの意味を読みとって、その意味内容において近似的なサブカテゴリーをグルーピングし、命名し、カテゴリーとした。

## 結果および考察

本調査の結果、60名の学生のうち21名から回答を得て回収率35%であった。21名の学生から139の記述が得られ、複数の研究者で分析方法に基づいて独立した文脈および単

語を取り出し、419のデータを得た。このデータから、意味の共通するものをグルーピングした結果、64のサブカテゴリーを抽出できた。さらに、このサブカテゴリーの意味内容を読みとってグルーピングし、23のカテゴリーを得た。その結果を表1にまとめた。以下、データは〈 〉、サブカテゴリーは《 》、カテゴリーは【 】で示した。

### 1. 看護の対象

〈患者〉〈家族〉〈傷を負った人〉〈心臓疾患〉〈病気と闘っている人〉など20のデータをグルーピングし、《病気を抱えている人》、〈健康に関して悩んでいる〉〈精神的・身体的に悩みを抱えている人〉など10のデータから《身体的・精神的に問題を抱えている人》、〈これから病気になりそうな人〉〈病気になりそうな人〉から《病気になりそうな人》というサブカテゴリーを抽出した。これらのサブカテゴリーから【病気の人】というカテゴリーをみいだした。この他に《健康を願う人》《援助を必要とする人》《家族が援助を望む人》《生活に支障がある人》《対象の家族》というサブカテゴリーをみいだすことができた。これらから【援助を必要とする人】というカテゴリーをみいだした。これらからは、学生が、看護の対象を何らかの援助を必要とする条件を持つ対象であることとらえていることを読み取ることができた。一方、〈人々〉〈一人でも多くの人〉など4つのデータからは《人々》、〈世界のすべての人〉〈生きているすべての人〉など5つのデータから《すべての人》というサブカテゴリーを抽出した。この他に《健康な人》《地域の人》も得ることができた。これらから【人々】というカテゴリーをみいだした。これらは、特殊な対象のみならず、人間全般にわたって看護の対象であるというとりえ方をしている学生がいることを示していた。

ある学生は、〈初めは病気の人が対象だと思っていたが、授業を受けていく中で、看護の対象は健康な人の中にもあるとわかった〉と記述していた。このことから、病気の人だけが看護の対象と考えていた学生は、授業を受けて健康な人も看護の対象である方向に対象のとりえ方が変化している途上であると考えられる。入学時点の学生は、看護の対象者について、病気の人であつたり何らかの援助が必要であるという条件を持った対象と感じ取っている傾向が強いが、入学後の教育刺激によって、健康な人も看護の対象であるという考え方が広がっていくことを示している。

大学における看護の基礎教育の段階で、1964年に日本看護協会が「看護とは健康であると不健康であることを問わず、個人または集団」<sup>10)</sup>とし、1973年には「健康のあらゆるレベルにおいて個人が」<sup>11)</sup>と示しているように、看護の対象者は健康のレベルに関係なく、あらゆる人を対象とするというとりえ方を学び取らせる

表1 看護に関するとらえ方

項目	カテゴリー	サブカテゴリー	データ数
1・看護の対象	病気の人	病気を抱えている人	20
		身体的・精神的に問題を抱えている人	10
		病気になりそうな人	4
	援助を必要とする人	健康を願う人	1
		援助を必要とする人	2
		家族が援助を望む人	1
		生活に支障のある人	4
		対象の家族	1
	人々	すべての人	5
人々		4	
健康な人		4	
		地域の人	1
2・看護の目的	健康の回復・維持	健康状態の回復・向上	14
		対象の回復	3
		病気の予防	1
	生活の質の回復	元の生活に戻ること	4
		健康で快適な生活	3
	社会復帰	1	
	ニードの充足	対象の幸福	4
対象のニードの充足	1		
安らかな終末	安らかな死への支援	2	
苦痛の緩和	心身の苦痛の軽減	1	
複数の目的	複数の目的を持つ	1	
3・看護の役割／機能	コミュニケーション	コミュニケーションの必要性	16
		コミュニケーションの技法	7
		対象の思いの表出を促すかわり方	8
	精神的ケア	心のケア	19
		思いやり	4
		心の状態の把握	1
		観察	4
	身体的ケア	身体へのケア	18
		排泄のケア	1
		清潔ケア	8
		環境調整	8
		身体の状態の把握	9
	安全な医療行為	医療行為	24
		医療技術の正確さ	3
		医療技術の迅速さ	1
支援	手助け・手伝い	6	
	人助け	1	
他職種との連携	医師の補助	4	
	医療関係者との連携	1	
専門的知識の保有	専門的知識	5	
対象を取り巻く周囲へのケア	家族のケア	2	
	周囲への配慮	2	
指導	療養上のアドバイス	3	
看護業務の遂行力	看護の実践に必要な手際の良さ	3	
	問題の解決	1	
	厳しい業務内容	1	
4・対人関係	対象の理解	対象をよく理解する	10
		良好な人間関係作りの技	16
		良い聞き役	8
		対象の立場への変換	8
		対象の尊重	3
	相互交流	5	
要め者5素に・必要な看護職	看護職者に求められる要素	勉強して知識を得る	15
		実践的な技術を身につける	5
		社会的な視野を広げる	6
		経験を積む	7
		積極的な姿勢(態度)	15
るが6場行・われ護	対象がいる場	社会のあらゆる場所	11
		地域	1
		自宅・家庭	14
		病院・学校	43

ためには、対象のさまざまな条件に沿って対象をとらえるための専門的知識と論理的な思考過程を具体的かつ実践的に教育し、看護の対象把握を確実なものにする必要がある。

## 2. 看護の目的

〈身体健康状態の回復〉〈健康に導く〉〈健康回復のための手助け〉〈回復や維持〉など14のデータから《健康状態の回復・向上》というサブカテゴリーを抽出した。〈病気の人へは回復〉〈第一に患者さんの回復〉などからは《対象の回復》を抽出した。〈病気の予防〉から《病気の予防》とし、これらから【健康の回復・維持】というカテゴリーをみいだした。これらのサブカテゴリーによると病気の人でも健康な人も、より健康な、あるいは回復の方向に向かうことが看護の目的であることを示していた。また、〈少しでも早く元の普通の生活に戻る〉〈病気になる前の生活まで少しでも近づける〉などから《元の生活に戻ること》や《健康で快適な生活》《社会復帰》といったサブカテゴリーを抽出し、【生活の質の回復】とした。看護の目的が生活面に着目しており、学生は看護の対象の生活者としての側面を視野に入れた看護を考える必要性を感じ取っていることがうかがえる。また、〈有意義に過ごす〉〈より良い人生を過ごせる〉など4のデータから《対象の幸福》を、〈患者の要求を満たす〉から《対象のニードの充足》もとらえている学生もいることが見えてくる。これらから、看護の対象の立場から意味を考えることが看護の目的につながるということを、とらえはじめている。

〈ターミナルの患者さんの場合、精神面の安定と安らかな死を十分に支えていく〉〈ターミナルの人は安らかな死を目指す〉からは《安らかな死への支援》、〈苦痛（精神的にも身体的にも）を和らげる〉から《心身の苦痛の軽減》とした。また、〈病気を治すだけではない〉から《複数の目的を持つ》を抽出した。学生は、4月に入学して一ヶ月あまりという非常に短期間ではあるが様々な教育刺激によって、看護の目的が単に健康の回復のみではなく、幸福や安らかな死など、社

会的な存在である生活者としての人間を視野にいれた看護の目的をとらえはじめていると考えられる。しかし、看護についてのとらえ方が判然とせず混沌と広がっている可能性もあると考えられる。ヘンダーソンが「健康あるいは健康の回復(あるいは平和な死)」<sup>12)</sup>と述べているように、看護は単独の目的のために行われるのではなく、看護の多面性を理解した上で対象の持つ様々な問題を解決するために多くの側面から働きかけるという考え方を確実に定着させるための教育を積み重ねることによって、次第に看護の目的について鮮明になると考えられる。

### 3. 看護の役割/機能

〈コミュニケーションを図ること〉〈患者とのコミュニケーション〉など16のデータから《コミュニケーションの必要性》、〈コミュニケーションをとる方法〉〈コミュニケーションの技術〉〈話術〉など7のデータから《コミュニケーションの技法》、〈話し相手になる〉〈知識や思いやりをもって対話する〉など7のデータから《対象の思いの表出を促すかわり方》を抽出し、【コミュニケーション】とした。この調査を行った時期には、学生が専門科目の「基礎看護技術Ⅰ」でコミュニケーションの単元を学習しており、この影響を考慮する必要があるが、看護の役割としてコミュニケーションを大変重視していることが考えられる。しかし、学生は、コミュニケーションについては日常的に体験し、その重要性を痛感しているにもかかわらず、データはほとんど具体的に表現されていなかった。このことは、コミュニケーションは言葉や体を道具として用いるが、人と人との間で交わされる精神の交流であり、コミュニケーションそのものには実体がないため、学生のとらえ方も抽象的にならざるを得なかったと考えられないだろうか。このような目で見て取れないものを教育するときには、コミュニケーションをしている両者の間にどのような交流が起こっているかを捉えるために、目に見えないものを目に見えるような表現におきかえて、それをを用いて教育を行っていくことが重要である。例えば、何をどのように感じたり考えたりしているかを、文章化したり話し合ったりすることによって、両者の関係を見える形に表現し、その場で起こっているコミュニケーションのあり方について、学習していくのである。

また、〈人を元気づける〉〈不安にさせない〉〈心のケアを行う〉〈精神的な援助〉〈精神的な病を治す〉など19のデータからは《心のケア》を抽出した。〈相手を思いやる気持ち〉〈自分のことでなく人を思いやる心〉などから《思いやり》を、〈患者さんの健康状態や心の状態をきちんと把握〉から《心の状態の把握》、〈人の求め

ていることを見抜く洞察力〉〈患者さんの状態に常に注意を払う〉から《観察》を抽出した。データによると身体的な観察というよりはむしろ精神的な観察について記述していた。今回の学生のデータからは、精神面での支えになることや精神面への援助といった抽象的なデータが得られ、このことから看護の役割として精神的なケアを重要視していることが伺えた。しかし、《心のケア》のなかに、〈精神的な病を治すこと〉という記述がみられた。このことから、医学的な治療と看護的な関わりの区別が現段階ではできていないことがうかがえた。

次に、〈患者のケア〉〈直接の介護〉〈患者の身の回りの世話〉〈援助すること〉〈マッサージ〉〈食事のお世話〉〈適度な運動方法〉など18のデータから《身体へのケア》を抽出し、〈入浴手伝い〉〈体拭き〉などから《清潔ケア》を、〈排泄の介助〉から《排泄のケア》を抽出した。これらのサブカテゴリーにおけるデータでは、入浴や体を拭くといった日常生活での具体的な行為を示す記述が多かった。学生自身が日常生活で経験していることであり、看護の対象が自ら行うことができない状態に陥った場合、自力では充足できなくなる可能性を予測することは容易であるから、ケアの内容を具体的に・感性的に把握できたと考えられる。我々の24時間の生活の中でなされている生活行動については、学習の場で積極的に想起させ学習材料に活用していくことができる。一方、このような生活経験に基づくとらえ方は、学生個々の個別的な生活習慣に根ざしているため、必ずしも合理的とはいえず、ひとつひとつの生活行動についての健康上の根拠を明らかにしながら看護の場面で活用できるような専門的知識に高める必要がある。〈環境を整える〉〈ベッドメイキング〉〈シーツ交換〉などから得た《環境調整》のサブカテゴリーについても生活経験に基づくとらえ方として同様であると考えられる。なお、《環境調整》については、「基礎看護技術Ⅰ」でコミュニケーションと同様に、学習しているため、講義の影響を考慮する必要がある。しかも、コミュニケーションとは対照的に学生の認識が具体的に表現されているのは、環境整備に関して具体的な援助行為を学んだため、一層具体的なとらえ方をしているとも言える。

〈検温〉〈血圧測定〉などの9のデータからは《身体の状態の把握》を、〈注射を打つ〉〈投薬〉〈応急手当〉など22のデータから《医療行為》を抽出した。この2つのサブカテゴリーについては、学生が一般的に医療現場では血圧を測ったり、注射を実施したりし、それが看護の役割でもあるととらえていると予想できる。加えて、《医療技術の正確さ》《医療技術の迅速さ》のサブカテゴリーからは、医療機器や医療処置を正確に、素早く行うことが重要であることは十分に理解してい

と考えられる。今回の調査では医療事故についての記述内容はみられなかったが、医療事故などの報道を目にする機会も多くあり、それらの情報から、正確で苦痛の少ない迅速な技術が求められていることを認識しているとも考えられる。

〈手伝いみたいなもの〉〈手伝い〉〈手助け〉など7のデータから《手助け・手伝い》《人助け》を抽出し、【支援】とした。学生は看護を必要としている対象に対して手助けや援助を行いたいと考えてはいるが、具体的に表現されていないことから、どのようなことができるのかという内容については漠然としたとらえ方であろうと考えられる。

〈医師の手伝い〉〈医師の援助〉など4のデータから《医師の補助》を、〈他の医療関係者ととにも…〉から《医療関係者との連携》を抽出し【他職種との連携】とした。看護は他職種との協力関係を基に対象のケアにあたる必要性について、現段階で学生は理解をしている。具体的な他職種との連携や共働関係については、今後の学習による必要がある。

〈患者の状態を把握するための知識〉〈専門の知識を持つこと〉〈身体の構造の知識〉〈心理的な分野の学習〉〈それぞれの病気に対する治療法・対処法〉というデータから、《専門的知識》を抽出し【専門的知識の保有】とした。看護が専門的な分野であり、そのためには専門知識が必要なことを認識していることがわかる。

〈患者の家族へのケア〉〈家族の援助〉から《家族のケア》、〈常に周りの状況を見ている〉〈一度にたくさんの人に気を配る〉から《周囲への配慮》というサブカテゴリーを得た。これらから【対象を取り巻く周囲へのケア】とした。看護の対象は患者そのものだけではなく、対象を取り巻く周囲の人々にも視線を広げる必要があるということや、対象ひとりだけに集中するのではないという意味も含まれており、学生は看護の対象を取り巻く周囲の人間関係を含めて看護の役割ととらえていることがわかる。

〈薬のアドバイス〉〈健康増進のアドバイス〉などから《療養上のアドバイス》を抽出し【指導】とした。患者の必要性に応じたアドバイスも看護の役割であるとしてとらえている学生もいることがうかがえた。

〈手先の器用さ〉〈冷静さ〉〈気持ちの切り替え〉から《看護の実践に必要な手際の良さ》、〈気づいた問題点を解決する〉から《問題の解決》〈よく言われる3K〉から《厳しい業務内容》を抽出し、これらから【看護業務の遂行力】とした。3Kというのは一般的にきつい、汚い、危険、の略であるが、これらのデータからは、学生が看護業務の遂行には冷静な判断や気持ちの切り替えが必要であり、看護業務に厳しい面も合わせ持っていることを認識していることを示した。

#### 4. 対人関係

〈相手の求めているものを知ること〉〈常に相手を少しでも理解しようと努める〉など10のデータから《対象の理解》を抽出した。〈作り笑顔（自然な笑顔）〉〈何でも話してもらえる関係作り〉など16のデータから《良好な人間関係作りの技》、〈どんな小さなことにでも耳を傾けること〉〈一生懸命聞く〉など8のデータから《良い聞き役》、〈不安にさせるようなことは言わない〉〈相手の気持ちを判断する〉など8のデータから《対象の立場への変換》、〈人間の尊厳を守る〉〈プライバシーを守る〉〈本人の意志を尊重する〉から《対象の尊重》、〈積極的に人と関わる〉〈相互理解〉など5のデータから《相互交流》を抽出した。これらから【人間関係の成立と発展の基本】とした。学生は《こころのケア》の項と同様に看護における対人関係を重要な要素であるとしてとらえていることが明らかになった。看護は、対象が人間であり、看護は人間関係の成立の上に成り立つものである。また、関係をつくるだけでなく、さらに対人関係の発展が求められているということが認識されている。

#### 5. 看護職者になるために必要な要素

〈授業を聞いてよく勉強する〉〈今は大学の勉強に必死で取り組む〉など15のデータから《勉強して知識を得る》を抽出した。学生の記述には、学生自身が現在取り組んでいる大学での学習を取り上げたものが多くみられた。〈講義だけでなく、実習を主に経験しながら学んでいく〉〈より実践的な技術を身につける〉など5のデータから《実践的な技術を身につける》を抽出した。学生は、看護技術を実践することができるように体験したいと考えていることが示された。〈常に向上心を持つ〉〈努力〉〈笑顔〉〈奉仕〉〈体力〉など15のデータから《積極的な姿勢（態度）》を抽出した。この他に《社会的な視野を広げる》《経験を積む》という5つのサブカテゴリーから【看護職者に求められる要素】というカテゴリーをみいだした。看護の実践に必要な看護技術として武田<sup>13)</sup>は①認知的技術（患者をみて療養上の問題を抽出する能力、判断能力、批判的思考力、問題解決能力、意志決定力などが必要である）②対人技術（相手の思考や感情をとらえる能力と、自分のそれらを対象に伝える能力、人間関係を調節する能力が必要であり、看護が人間対人間の関係により成り立つものであることから極めて重要な技術である）③手技的技術（清潔・摂食・排泄・運動などの日常生活行動援助、手術・検査といった医療処置を受けるにあたっての援助など、すべての直接的看護ケアの基礎となる。）と定義づけている。この定義にそって考察すると、①認知的技術として《勉強して知識を得る》《積極的な姿勢（態度）》、

②対人技術《社会的な視野を広げる》《積極的な姿勢(態度)》③手技的技術《実践的な技術を身につける》《経験を積む》が関係すると考える。看護技術に必要なこれらの要素は、今後の学習を重ねることによって修得していくと考える。

## 6. 看護が行われる場

看護の対象や目的と同様に、広い視点でとらえ〈社会のどのような場所でも行われる〉〈全世界で行われる〉〈看護を必要とする人がいるところ〉など11のデータから《社会のあらゆる場所》を、〈地域の中〉から《地域》、〈家〉〈自宅〉などから《自宅・家庭》、〈病院〉〈学校〉〈老人ホーム〉〈保健所〉などから《病院・学校》を抽出した。これらから【対象がいる場】とした。看護は、看護を必要とする人がいるあらゆる場所で実践されており、学生の記述からはそのことを十分認識しはじめていくといえる。学生がどのような場であっても看護の目的を明確に持ち、看護を実践することができるような教育が必要と考える。

以上より、入学初期の学生の看護に関するとりえ方の傾向について、

1. 学生は、看護の対象や看護が行われる場について、授業の進行に伴って具体的なとりえ方に変化しつつある。
2. 看護の目的について、健康状態の回復のみではなく、生活の質の回復にも着目し、看護の対象の立場から意味を考える傾向が示された。
3. 学生は日常生活行動に基づく援助技術について、自己の生活経験に基づいて具体的・感性的にとらえていた。
4. 学生は精神的な援助についての関心は高い一方、抽象的な表現にとどまり、援助方法について漠然としたとりえ方であった。
5. 対人関係については、看護の実践上、重要な要素であるととらえており、コミュニケーション能力の向上が重要であるととらえていた。
6. 医療行為について、正確さや迅速さの重要性をとらえていたが、医療行為の内容は具体的にはとらえていなかった。
7. 看護職者になるために必要な要素として、学生自身が現在取り組んでいる大学での学習を多く取り上げており、実践的な技術を身につけることを必要ととらえていた。

今回の研究では、学生60名中21名であるから、全学生の看護に関するとりえ方の特徴と断定はできないが、大づかみな傾向を把握したと考える。学生の記述は全体的

に質問紙の設問に対して抽象的でシンプルな表現であり、具体的なイメージを表現する内容を持ち合わせていないと考える。今後の教育によって、豊かで具体的な内容に変化が起きてくると考える。この結果を前提にしながら、今後、看護に関する学生のとりえ方について縦断的に追跡していくことで、学生の看護のとりえ方の特徴と変化を明らかにしていく予定である。

また、今回の回収率が35%と低かったことは、学生が記入する際に、質問紙の設問内容が、看護に関して捉えていることについての記述形式であったため、入学初期の学生にとっては、自己の認識を文章として表現することに困難さを感じたのではないかと考える。回収率の低さについては、次年度の課題である。

## 引用文献

- 1) 看護学教育の在り方に関する検討会報告, 2002
- 2) 渡邊裕美, 杉山敏子他: 看護学生の卒業時における「病院」「患者」「看護婦」「看護」のイメージの変化——年次と比較して——, 東北大学医療技術短期大学紀要, 5, (2), 141-148, 1996
- 3) 山内葉月: 看護意識の啓発に関する研究 第4報—短大看護学生の看護認知の変化, 入学から卒業まで—, 熊本大学医療技術短期大学部紀要, 7, 1-10, 1997
- 4) 白神佐知子, 栗本一美, 土井英子, 上山和子, 塚本千恵子, 石本傳江: 看護学生の卒業期における看護概念の認識構造と今後の課題—平成2年カリキュラムにおける学習効果としての分析—, 新見公立短期大学紀要, 20, 63-75, 1999
- 5) 立石有紀, 岩本真紀他: 看護学生の看護観の形成過程—看護学概説, 看護理論の科目前後における看護観の変化から—, 香川医科大学看護学雑誌, 6, (1), p.63-67, 2002
- 6) 前田ひとみ, 永田まなみ他: 看護学生の看護概念の形成に関する研究(1)—「人間」の概念の変容—, 熊本大学医療技術短期大学部紀要, 8, 17-27, 1998
- 7) 前掲4)
- 8) 前掲5)
- 9) 前掲6)
- 10) 日本看護協会保健婦部会編: 保健婦業務要覧(改訂第6版), p.3, 日本看護協会出版会, 1980
- 11) 日本看護協会: 看護制度改善にあたっての基本的な考え方, 看護25(13), p.52-56, 1973
- 12) Henderson. V: Basic Principles Of Nursing Care(2rd), 1969, 著, 湯槇ます・小玉香津子: 看護の基本となるもの, p.11, 日本看護協会出版会, 1973
- 13) 武田祐子: 看護学事典, p.106, 日本看護協会出版会, 2003

## 要 旨

大学1年次生の看護に関するとらえ方について明らかにするために、入学後一ヶ月の時期にアンケート調査を行った。その結果、学生の認識は学習を受けた専門基礎科目の影響を受けて、看護の対象や看護が行われる場については具体的なとらえ方をしていた。看護の目的については、健康状態の回復のみではなく、生活の質の回復にも着目し、看護の対象の立場から意味を考える傾向が示された。日常生活行動に基づく援助技術について、自己の生活経験に基づいて具体的・感性的にとらえていた。精神的な援助についての関心は高いが、援助方法については漠然としたとらえ方であった。看護の実践上、対人関係は重要な要素であるにとらえており、コミュニケーション能力の向上が重要であるにとらえていた。医療行為について、正確さや迅速さの重要性をとらえていたが、医療行為の内容は具体的にはとらえていなかった。